

とちぶん会報

No.64

2021年7月10日

栃木県文芸家協会 発行人 福田 三男
事務局／栃木県下都賀郡壬生町中央町 16-18 三上方
〒321-0226 TEL090-9318-2492

令和3年度定期総会を開催しました

令和3年度栃木県文芸家協会総会が、5月16日(日)午後1時30分から栃木県教育会館[宇都宮市]において開催されました。福田会長が議事進行を務めました。会員17名が出席いたしました。

審議事項の①令和2年度栃木県文芸家協会事業報告、②令和2年度栃木県文芸家協会収支決算報告、③令和3年度栃木県文芸家協会事業計画、④令和3年度栃木県文芸家協会収支予算は、事務局からの説明があり、審議のうえすべて承認されました。

その他として、昨年度開催中止となった夏季講演会については、今年度は講師を外部から招聘して実施することが了承されました。また会員数が減少傾向にあることから、増加に向けての方策が議論されました。

最後に、このたび俳句部門に入会した斎藤光星会員が朝明編集委員に就任することが報告されました。

なお今回の総会配付資料は、協会の公式ホームページにおいて、会員限定で閲覧可能となっています。総会を欠席された方は是非ご覧になってください。

例年総会終了後に開催されている懇親会は、新型コロナウイルスの影響により今回も中止となりました。

夏季講演会を開催します・講師は 堀江一郎先生

昨年度は、予定していた秋季講演会が講師の都合により中止となりましたが、今年度は例年どおり夏季講演会として8月21日(土)に開催することとなりました。講師に文星芸術大学の堀江一郎先生をお迎えして以下の内容で行います。会員の積極的な参加をお願いいたします。

なお、総会において配付した今年度事業計画の資料では「8月22日(日)」に夏季講演会を開催することが記載されていましたが、会場の都合により、前日「8月21日(土)」に変更となりました。お間違えのないよう、よろしくご承知おきください。

- 日 時 令和3年8月21日(土) 午後1時30分～3時
- 会 場 栃木県教育会館 [宇都宮市駒生1-1-6/TEL 028(621)7177]
／JR宇都宮駅方面から関東バス「作新学院・駒生」行きに乗車し「東中丸(会館前)」下車
* 駐車場有り
- 講 師 文星芸術大学 堀江 一郎先生
- 演 題 「アートとエンターテインメントの間ー「分業」による作品制作についてー」
* 内容／文学作品といえ、一人の作家が内省をもとに書き上げるもの。

しかし、アニメーションはもちろん、小説やマンガ、音楽まで、「複数の人間」が協力して作った「名作」は、世に数多く存在します。文学、名作、芸術…これらのワードの境界線とは？ 共作や分業によって作られた、エラリー・クイーンの小説、ビートルズの楽曲、マンガ「あしたのジョー」等々は、芸術ではないのか？

執筆は孤独な作業…と思っている作家の方々の目にはなんとも不思議に映るであろう「共同制作」「分業」について考えます。

* 講師紹介／1962年愛知県生まれ

1986年株式会社小学館入社

「ビッグコミックオリジナル」「週刊少年サンデー」「ビッグコミック」編集部勤務。

「釣りバカ日誌」「機動警察パトレイバー」「らんま1/2」「め組の大吾」「のたり松太郎」等の連載を担当。

2006年より文星芸術大学マンガ専攻勤務。

マンガ作品のシナリオや教本も執筆している。

※ 講演会終了後の懇親会は、コロナ禍を踏まえて今回も開催しません。

※ 同封した出欠の返信ハガキを8月16日(月)までに事務局あて必ず郵送してください。

※ 会員の友人・知人で講演会へ参加したい方は、会員から事務局に申し出てください。

第1回編集会議を開催・『朝明』第10号発刊へ

6月20日(日)午後1時30分から、おかりや[宇都宮市]において朝明第10号発行に係る第1回編集会議を開催しました。9名の委員が出席しました。

まず特集テーマについては、各委員からいろいろな意見が提示され、これらについて活発な議論が行われました。最終的には「ときめいた時」がテーマとして決まりました。

表紙については、前号までの例を踏まえながら議論し、今回は佐野市の「天明鋳物」の作品写真を載せることとなりました。

最後に、資料に基づいて第10号の原稿提出要領が審議されました。要領の内容は前回とほぼ同じものとなりました。また、前号と同様に冊子体の発行の他に電子化(PDF)も図り、第11号の発行後(令和4年12月)、協会公式ホームページに全文アップロードすることも改めて確認されました。

作品の提出期限は9月末日です。別添要領に基づいて作成・提出してください。

『創作への志』 会員通信 No.20 小説部門 福富 陽子

小説を書くのは孤独な長期の作業である。物語を編む作業は自分で己の内面を掘り下げていくようなものである。掘り下げれば頭上を見る、その繰り返しかもしれない。掘れど掘れど何も無いと感じたとき、私はそのシャベルを手放すだろう。

小説に限らないが、読み手が居てはじめて作品となる。ゆえにひとりよがりには陥らず、書き手は常に平常心を要求される。そこは留意したい。

座右の銘は、立松和平さんの遺した言葉、「毎日書く、一行でもいいから書く」。

現実には毎日とはいかないが、孤独な作業を愉しみながら「己の内面探検家」としてシャベルを携え歩いている。多忙につき「書けない」と言い訳はしたくない。

§ 寄贈書籍の紹介 §

○「那須の緒 第13号」／発行所・貝塚津音魚／発行日・2021年5月19日[発行所からの寄贈]

* ∞ * 事務局通信 * ∞ *

協会の会員数が90名を割ってしまいました。今年度限りで退会する方も数名おり、来年度はさらに厳しい状況となります。5月に開催された総会でも会員増加のための方策が議論されましたが、一気に増えるようなことは見込めません。栃木県芸術祭、宇都宮市民芸術祭の文芸部門において審査員を務めている会員が何名かいます。そういった方は、各部門の作品講評会や表彰式・懇親会などで、入賞者に当会入会の勧誘をしていただけだと思います。事務局には朝明のバックナンバーがまだ残っています。また、入会申込書や協会規約もあります。事務局あて請求していただければいつでもお送りします。そういった資料をもとに是非勧誘していただくよう、よろしく願いいたします。(三上)